

ある犯罪者における親子関係の特徴

The Relationship between Parents and Their Son :
In the Case of One Criminal

樋口康彦

HIGUCHI Yasuhiko

はじめに

1981年に起きたパリ留学生人肉食事件は当時高校生であった筆者らの印象に強く残り、犯人のAが最初に著した本をいち早く買い求めた。

ちなみに本を買って帰宅し両親にそのことを告げると「えっ、あの人文章書けるの」と言われたことをはっきりと覚えている。人を殺してカニバリズムをするような人は「言葉の通じない野獣」というイメージを持っていたようだ。そう言う我々自身も本当に本人が書いたものなのか確信が持てないでいた。しかし、本を一読しておおよそ本人以外誰も書けないような衝撃的内容だったのでその疑いは霧散した。また、野獣どころかAが最高レベルの教育を受けたインテリであり、また大変繊細な心の持ち主であることにもまた衝撃を受けた。

筆者らは事件が風化した後もAに関する全著作、映像作品などを手に入る限り取り寄せ、この不可解な事件に関して現在も研究を続けている。

なぜここまでこだわるのか。筆者らにはカニバリズム幻想はないものの、Aの孤独な半生が我々の半生と重なったからであろう。

凄惨な事件を生んだAの心理をなぞっているうちに、やがてAの家族、特に親子関係に興味を持つようになった。そこにこそ事件の原因、本質が含まれているように思えたからである。本論においてはAの親子関係から事件を引き起こした原因に迫っていきたい。

なお本論執筆にあたっては、2006年の作品「業火」を基に考察していくことにする。Aの全著作18冊のほとんどは事件について、あるいはA自身の妄想について語っている。しかし、「業火」においては、事件前の家族の様子、彼の起こした事件が家族に与えた化学反応について非常に詳細に綴られているからである。

なお本論で用いるデータは全て本人の著書および映像、雑誌記事などに基づいてい

る。

調査

Aについて

氏名：A(仮名)

略歴

1949年：兵庫県神戸市生まれ。体重1500グラムの未熟児として生まれる。

1972年：ドイツ人女性を襲い逮捕される。しかし親が多額の示談金を用意する。示談が成立し、不起訴処分になる。

1973年：和光大学人文学部卒業。

1976年：関西学院大学大学院修士課程修了。

1980年：フランスソルボンヌ大学大学院修士課程修了。専攻は英米文学および比較文学。

1981年：ソルボンヌ大学大学院博士課程在学中に、オランダ人留学生ルネ・ハンテヴェルトを自室にてライフル銃で射殺する。死姦の後、その肉を食す。

ショッキングな内容から世間の耳目を集めるとともに、国際問題となる。しかし、フランスにおける精神鑑定の結果、心神喪失状態にあったとして不起訴処分となる。

1983年：フランスの拘置所にて事件の顛末についてノートに記す。それは「霧の中」という題名で日本において発売され40万部を越すベストセラーとなる。日本に帰国し、東京都の松沢病院に入院する。

その後、霧の中を含め2008年までに計18冊の著作(うち2冊は共著)を出版する。

身体的側面：元々未熟児だったということもあり体力のレベルは非常に低い。

乗っていたタクシーが急停車しただけで鞭打ち症になって通院したり、一日皿洗いのバイトをすると翌日は疲労から起き上がれなくなるほどである。

ちなみにVHSビデオ「Aの一週間」においては、100メートル走などの体力測定が行われている。しかし、全ての種目において同年齢の平均値に達していない。

知的側面：A自身、自分は理数系のことは非常に苦手であると何度も述べている。彼の著作やインタビュー記事を読む限り、知的レベルは非常に高いと推察される。

仮定の話になるが、我々は彼がもし事件を起こさず文学に関する研究者として精進していたならば、かなりの成功を収めていたのではないかと考えている。

対人関係：全著書を見渡しても、親の話ばかり出てきて友だち・友情の話はほぼ全く出てこない。そこで友人はほとんどいないと考えられる。ただし、

友人に迷惑をかけてはいけないという配慮からあえて記述していないだけかもしれない。

また被害者である女性との間に実質的な人間関係があったかどうかは不明である。それから少なくとも事件の時まで、恋愛関係を一度も経験していないと推察される。

家族：父は東京商大卒。大手総合商社勤務を経て、事件当時は東証一部上場企業の社長を務めていた。母は資産家令嬢。ひとつ年下の弟は有名私立大学卒業後、広告会社勤務。

考察

両親のAに対する養育態度

(エピソード1)

竹登り、平均台が不得手と知ると、忽ち庭は子供たちの遊園地と化す。

僕と弟は指を銜えてみているだけだった。

父はそれでも懲りず自転車を買ひ、ブランコを吊し…………。

(P 93)

(エピソード2)

…………高校時代であったか、父が僕の為に揃えた世界文学全集の内より、スタンダールの『赤と黒』を取り出そうとした僕の手から、ちょうど林檎の皮を剥く折のように、分厚い掌で素早く本を奪い去って言った。

「お前には早すぎる。これは男と女の話だ」

(P 98)

(エピソード3)

ええ坊主や

ええ坊主や

並外れて酒に強かった父は、毎夜、腰の立たぬ程に酔い潰れて帰り、

「頼むから大声だすんやめてよ！」

と母に叱責哀願されつつも、必ず僕と弟の部屋にそう叫びながら向かった。強烈な酒の臭いと脂ぎった大きくて柔らかい掌で、僕たちの髪を、頬を撫で上げる。

二人の兄弟は既に二十を超えていた。

(P 88)

(エピソード4)

「ほら、貸さんかい。どうせお前には剥けんやろ」

林檎の、光沢を帯びた表を虚しく掠めるだけのナイフ—僕の手にあったそれは忽ち、横合いから伸びた父の厚い掌に移動して、同時に消え去った林檎がスカスカ音をたてて皮が剥かれていく……僕が二十を過ぎても同じ情景が繰り返されていた。

(P 7)

(エピソード5)

「あの娘が憎らしい！一ちゃんをこんなに不幸にして」
娘とは、僕の殺めた被害者のことである。

(P 7)

(エピソード6)

日本の精神病院に入院しているときの出来事。

カンファレンスと云う名の、病院の医師全員が僕に問診をする時が近いと聞いた母は、僕の身体のサイズに合わせた、明るいブルーのスーツを設えて持参する。

(P 185)

(エピソード7)

(ドイツから)帰国し、いつものように両親宅に夕食に赴くと、飛び出してきた母が僕に抱きついた。

「ああ、一ちゃん、一ちゃん。またどっかに行ってしもうたか思おて……」

(P 228)

エピソード1から7より、非常に過保護な親であったことがうかがえる。まさに金に物を言わせつつあらん限りの愛情をAに注ぎ込んだという感じである。

エピソード2からは大事にしているという以外に、Aを子どもとして扱いたいという意図が見て取れる。

次にエピソード6を検討したい。入学式や就職活動のために背広を新調してあげるということは聞いたことがあるが、こんな発展性のないことのためにスーツを新調するというのは親としてもさぞかし虚しかったであろうことは容易に想像がつく。しかし、息子のために精一杯のことをしてあげようとする親心が見て取れる。

そしてエピソード7であるが、一般に子どもの成長とともに親子関係を適切に変化させることが大切なのであるが、はたしてAの家族においてはそれがうまく行っているのかどうかという疑問が生じる。あまりにも子ども扱いしているからである。ただし、中年とはいえ、あのような事件を起こした息子であるので人一倍心配していただけかもしれない。

親が過保護な理由

(エピソード 8)

母の脳裡に、あの、朝日に包まれた墓標がふたたび甦る。

「また死なせるん！？ また死なせるん！？」

父の胸を、母は拳で激しく打った。

「死なせてなるもんか、死ぬもんか」

父は、ぐしょ濡れの臉から眼鏡をとる。

(P 42)

(エピソード 9)

「十まで生きれば上等ですよ」

医師のこの言葉は、両親のこころの総て、おもいの総てを僕に注がしめた。

(P 45)

(エピソード 10)

就職口と共に、父は僕の結婚相手も決めようとした。政治力に長けた教授に、僕が大学院の試験に合格するようコネをつけていた父だ。

社会性を著しく欠いた息子の人生のレール敷きに、躍起となっていたのだろう。

(P 105)

(エピソード 11)

「わたし、死にます！！！」

そんな風に殴り書きされた紙片を食卓の上に残し、夜毎姿を晦ました。血相を変えて父が後を追う。

(P 87)

(エピソード 12)

「お前、パ、パリ、やったこと、あんなとこ、やらんかったら、よ、よかった……」

(P 250)

(エピソード 13)

《一ちゃんが、もっともっと体も大きく丈夫だったら、おそらく今度のような事は絶対に起こらなかったと思います》

収監された後も、このような文面の手紙を送りつづける母であった。

—略—

僕の容姿にひどくコンプレックスを抱いていたのは、僕本人ではなく、母であったかも知れない。コンプレックスの根には、罪悪感すら窺えた。

(P 78)

(エピソード 14)

《一ちゃんを小さく産み、大きく育てられなかった事を本当に申し訳ない(どうしようもないことですが)思いで、ただただ一ちゃんがかawaiiそうでかawaiiそうでたまりませんでした。

もし一ちゃんが、アラン・ドロンの様に(頭は空っぽでも)大きい身体なら、こんな事にはならなかっただろうと複雑な気持ちで、本当にかawaiiそうという気持ちで一杯です》

(P 160)

エピソード 8 から、両親が過去に幼子を失ったことがあるため、とりわけ A に対しては思い入れが強いことが見て取れる。

エピソード 9 から、A が未熟児で体が非常に弱かったため、ある程度過保護にせざるを得なかったことが見て取れる。

エピソード 10 から、親は A は社会性に欠けていることを十分認識して心配していたことがわかる。

エピソード 11、12 から、A が過去に白人女性を襲って逮捕されたことがあるのに、白人の多く住むフランスに行かせたことを後悔し反省していることがわかる。多分、体を張ってでも止めなかったことを A に対して申し訳ないと思っているのだろう。

エピソード 13、14 から、彼をもう少し見栄えよく産まなかったことに関して、親が申し訳ないと思っていることがわかる。ところで、彼の身長に関する記述は資料によってまちまちなのであるが、概ね 150～155 センチメートルあたりであろう。

これら全てのことが要因となって A に対する尋常でない過保護な養育態度につながっていったと考えられる。

両親に対する A の態度

(エピソード 15)

一大学時代、母と僕は二人で新劇の会員となっていた。

芥川比呂志、滝沢修など、希代の名優の演技、立ち姿に、若い僕の瞳は釘付けとなり、常に僕の隣の席にある母もまた、熱烈な芝居好きとなる。

(P 77)

(エピソード 16)

林檎の皮を剥こうとする。

不器用に空廻りするナイフを、傍らより伸びる太い指先が、さっと取り上げる。

「お前には無理や。ほら、儂が剥いてやる」

既に僕は二十に差しかっていた。だが僕は父の、そんな口吻に抗うどころか、甘え

ていた。だから今でも林檎の皮を剥くことができない。

(P 93)

(エピソード 17)

刑務所の中である女性医師からこのようなことを言われている。

「一略一 貴方はね、お母さまの愛情の中にまだ浸っていて、一個の自己として自立出来ていないって。

普通の人にはね、母親の愛情の中で、少しずつ母親の庇護から離れていくものなの。そして両親を見本として、自我理想を築き、それを土台に、対象愛へと発展していくものよ。一略一」

(P 150)

一般的に言って、子どもがある程度の年齢になれば親の過保護に関しては干渉と感じ、「放っておいてくれ」となることが多い。

しかし、Aの場合、親からの過保護を受け入れ、あえて拒絶する気はなかったようだ。

通常、大学生にもなって母と何度も芝居を観に行ったりしないであろう。

Aが親の過保護を拒絶しなかったことは共依存関係の形成へとつながり、その共依存関係を長引かせることになったと推察される。

そしてそのことは、Aの健全な自我の発達の障害につながったのではないだろうか。

親の被害者に対する贖罪の気持ち

(エピソード 18)

獄中につながれたAに対する父親からの手紙。

《一略一 君にはまだまだ人に誇る事の出来る事が沢山あるのだ。例えば、純粋な心、弱きものを可愛がる美しい心、自然の美を素直に受け容れる心、表には出ないが、強い魂、どれをとってみても、君はこれからも堂々と大手を振って大道を歩ける人間だ。その辺りにうようよしている蛆虫共とは、訳が違う。

愛するわが子よ、Aよ、僕の云ったこと、よくよく頭に入れて健在なれ。

君が帰るまでは、否、一人前になるまでは、僕は絶対に死なぬ》

(P 131)

(エピソード 19)

《一略一 今君は、再び生き返って、ものを書くなり、評論をするなりして、世の中のために、又、悲しみのどん底に落とし入れた我々三人(僕、お母ちゃん、B)のた

めに再起する義務がある》

(P 154)

(エピソード 20)

拘留所にいるAに母親が送った手紙。

《何時も一ちゃんを起こす時にしていた様に、頭を撫で手を擦り、足の裏をこそばしたり…………ともかく思う存分、抱き締めてあげたい気持ちで一杯です。小さな時の様に、一緒に蒲団の中で、頭の毛をやさしく撫でてあげようと思っています》

(P 164~165)

(エピソード 21)

フランスの拘留所にいるAへ母が送った手紙。

《今、一人でテレビのシェイクスピア劇を観ました。遅いから、観る積りではなかったのですが、一ちゃんがいたら、さぞかし齧りついて観るだろうと思って…………

一応ビデオに、Bちゃんが大急ぎで録画しました(何時になったら一ちゃんがこれを観られるかしら…………と思うと、又、お母ちゃんは悲しくなりました)。一略—》

(P 77)

エピソード全体を通じて、Aの両親はただひたすら犯人である息子Aの身を案じているだけである。そこにAが殺めた被害者に対する贖罪の気持ちは感じられない。

エピソード 19の父の言葉は最もそのことを表わしている。BとはAの弟のことであり、我々三人の中に被害者は含まれていない。

「自分の家族さえよければ他人のことなど…………」というのは大抵の家庭の本音であろう。ただAの家族においてはそのことが極端であり、このことはAの犯行を生んだ土壌になっていると思われる。

Aによる親子関係の認知

(エピソード 22)

本当に自分は、父の子なのであろうか、母の子であらうか…………。橋の下で拾われたのを哀れに思い、だから過剰な位の愛を注いでくれているのではないか

(P 55)

(エピソード 23)

父が元在籍していた商事会社のパリ支店の顧問弁護士は、フランスで最も高くつく弁護士として有名であった。父は即座に彼を雇い、六月の株主総会で社長の座を退く

ことを表明、その退職金の全てを擲って、パリ、東京、を奔走していたのだ。そんな父に憑依していたものはおそらく僕に対する途方もない愛であったに違いない。過剰に過ぎる父親の愛、あるいは哀しい程に高価なる代償……。

(P 130)

自分が他人に比べ過保護に育てられたことは自覚しているようだ。

ところでエピソード 24 では「哀しい程に高価なる代償」と述べている。つまり A は親のあまりにも過保護すぎる親の態度が、犯罪の遠因になったことをここでほのめかしている。

両親の死に対する A の反応

(エピソード 24)

親とは離れた所にある自宅に帰るタクシーの中で、病床に付している母について考えるシーン。

何とか生きていて欲しい

そんな強烈な思いが、平坦な自分のこころを打ち砕き押し上げてくることに、僕は少し驚愕した。

(P 274)

(エピソード 25)

父の死に際して。

「亡くなった。十一時十三分」

か細い弟の声は睡魔の呟きにきこえ、亡くなったなる言葉は、その意味するところが欠落したまま動かない。

(P 17)

(エピソード 26)

母の死に際して

「気を落とさないでね、亡くなった」

慎しやかな弟の声だった。何も感じることはなかった。ただ携帯電話を手に、前屈みの僕の姿勢は、あざみ野まで変わることはなかった。

(P 19)

(エピソード 27)

斎場に両親の名が張り出されていなかったことに対して。

お父ちゃん、お母ちゃんのお葬式まで、僕は歪なものにした

(P 21)

(エピソード 28)

両親の骸と一晩一緒に過ごしたことを弟が怖かったと言っているのを聞いて

怖い？お父ちゃんとお母ちゃんと一緒にじゃないか……あ、そうか、死んでる、から、……でもやっぱり、お父ちゃんとお母ちゃんだ

(P 22)

(エピソード 29)

鉄のトレイに集められた母、であろうその石灰質の塊りに、僕は表現する言葉を失い、序でに感性すら喪失して、非道く無機質な瞳でただ打ち眺めていた。

(P 301)

(エピソード 30)

両親を火葬した後。

早朝、近くのファミリー・レストランでモーニング・サービスを取り、アパートに引き返そうとした僕の細い目に、空の、濃い青が伸し掛ってきた。

父が、母が、あんな処に……

その、あまりの隔たりに、僕は身体から魂の抜けていくのを覚えた。

(P 31)

ところでAは父の存命中に「父が逝った。その時私は……」なる文章を月刊誌に寄稿している。このような表現方法に関しては唐沢(2006)、中村(2007)などにより疑問の声があがっている。

またエピソード 24 から 30 までのAの文章からは「涙」という文字がどこにも見当たらない。そのため、両親の死を本当に悲しんでいるのかという疑問が生じる。

しかし、Aの全作品を細かく検証すればわかるのであるが、これはAの文章スタイルなのである。

例えば「その、あまりの隔たりに、僕は身体から魂の抜けていくのを覚えた」の後に「身を切り裂かれるように悲しい」まで書くのではなく、その前までしか書かないのだ。Aの文章を細かく検討すれば実際には誰よりも両親の死を悼んでいることがわかる。

なぜ親を裏切りマスコミに進出することを選んだのか

(エピソード 31)

『霧の中』が刊行された直後、フランスの精神病院に、日本の父から電話が入った。受話器を耳に当てた途端、飛び掛かる勢いの怒声が弾けた。生まれて初めて僕は、父のこころ深くに滾っていた激しい怒りの炎を浴びる。

それは奇妙に艶のある罵声だった。

折から褐色の夕日が塀の向こう側に堕ちていくさまと打ち重なり、激しい吐き気を覚えた僕は、地面に叩きつけられた。

宙ぶらりんとなった受話器より、めらめら炎が上がっている。

(P 174)

(エピソード 32)

マスコミと接触するAに宛てて母親が書いた手紙。

一ちゃん、どうして自分で自分の運命を悪くなるように悪くなるように引っぱってゆくのですか？

(P 142)

(エピソード 33)

人肉食と云う、恐らく人間の行為の中で最も悍しいものを、自分達の息子が犯したと喧伝されることは両親にとって、身を切られる思いであろうこと位はさすがの僕も察し得た。

否、察し得た筈だった。

僕は両親に復讐でもしたかったのだろうか？ 人並み外れて溢れるばかりの愛を受けて育った僕に、なぜ復讐などする必要があったのだろうか。

あろう筈もない。

(P 156)

(エピソード 34)

フランスの病院で女性医師から

「貴方のようなタイプの者はね、容赦なく他者を利用し、収奪し、他者の人生や生命すらも、束の間の快樂のために犠牲にしても心痛むこともない。搾取することに良心の痛まないのが貴方よ。一略一」

(P 157)

(エピソード 35)

雑誌の取材記者からの連絡。

「手記を書いて頂きたいのです。それも早急に。……」

「バカヤロウ！！とんでもないぞ。マスコミに出るなどあれだけ言ったろうが。もしまた出たら、病院に送り返すぞ！」

父は激昂した。

その旨女性記者に伝えると、

「あなた、いくつなの！？自分のことは自分で決められる年でしょう。親の言うことなんか……」

決して女性記者の、こんな高飛車な物言いに屈した訳ではなかった。

僕は文章をまた書きたかったのだ。

(P 220～221)

エピソード 31、32 より、親はAに、マスコミに出ることなく、ほとぼりを冷ますことを望んでいたことがわかる。そして可能ならば結婚して普通の社会生活を営むことを望んでいたのであろう。

このようにマスコミに対する接し方に関しては事件当初から強く釘を刺されていたのである。

ところがある日のこと、Aの元にエピソード 35 にあるように、平成元年に起きた連続少女殺害事件に関する取材の依頼が舞い込む。同じく猟奇殺人者であるAなら、一般の人にはうかがい知れない犯人の真相を解説してくれるのではないかという意図からだろう。

「僕は文章をまた書きたかったのだ」

Aがマスコミに出るのは、表現することへの欲求に勝てず、家族よりも自分の欲求を優先させた結果だと言える。

自分の犯罪が親の寿命を縮めたという自覚はあるのか

(エピソード 36)

一略一父の遺骨、母の遺骨を骨壺より流し込むと、スーッとどこかに消えていく。読経の最中、突然陽が射した。

見上げると青い空で、

あの小さな穴が、この大きな空に繋がっているのか、と僕は自ら問うた。

そうでもあり、そうでもないように思われる。少なくともそこには、あの竈の炎も轟音も、僕のカルマが放つあお白い業火も、最早届かない。

(P 312)

「僕のカルマが放つあお白い業火も、最早届かない」などと書いて「業火」を締めくくっている。このあたりに、自分が親を苦しめそしてそのことが親を死に追いやったということはある程度自覚しているように読み取れる。

ちなみに両親が亡くなった頃からそれまではほぼ皆無に近かった実弟に関する記述が増えてきている。このことは両親ではなく今度は弟に寄生しようとしているかのようにも受け取れる。しかしこれは弟がこれまで勤めていた広告会社を辞めたため、書きやすくなったことが原因かもしれない。

まとめ

事件を引き起こした本当の原因はわからない。ひょっとするとA本人にすら、なぜあんなことをしてしまったのかわかっていないかもしれない。

しかし、これまで調べてきた知見をもとに我々なりの結論を導き出してみたい。

まずAは両親にとって幼子を失った後に生まれた子どもであり、また未熟児で体が弱かった。このことからAは極度の過保護に育てられた。

Aもそんな両親を拒絶しなかったことで共依存関係が成立した。その共依存関係はAが中年にさしかかった後も延々と続いた。

このことは次第にAを、「自分の欲求をかなえなければ我慢できない」性格にしていった。自分の欲求をかなえるためなら、他人、そして家族でさえも犠牲にすることを厭わない性格にしてしまったのである。

そして、幼い頃からの妄想であるカニバリズム幻想を満たしたいという強迫観念を実現させるに至った。

参考文献

- 唐沢俊一 2006 猟奇の社怪史 ミリオン出版
 中村うさぎ 2007 うさぎが鬼に会いに行く アスキー
 佐川一政 1983 霧の中 話の特集
 佐川一政 1990 生きていてすみません 北宋社
 佐川一政 1990 サンテ 角川書店
 佐川一政 1991 蜃気楼 河出書房新社
 佐川一政 1991 カニバリズム幻想 北宋社
 佐川一政 1993 食べられたい ミリオン出版
 佐川一政 1994 華のパリ、愛のパリ I P C
 佐川一政 1995 狂気にあらず 第三書館
 佐川一政 コリン・ウィルソン 1996 饗カニバル 竹書房
 佐川一政 1997 殺したい奴ら データハウス
 佐川一政 1997 少年A ポケットブック

- 佐川一政 根本敬 1998 パリ人肉事件～無法松の一政 河出書房新社
佐川一政 2000 まんがサガワさん オークラ出版
佐川一政 2002 霧の中の真実 鹿砦社
佐川一政 2002 漫画サンテ マンダラケ
佐川一政 2002 復刻版霧の中 彩流社
佐川一政 2003 父が逝った。その時私は…………… 創, 8, 112-121.
佐川一政 2006 業火 作品社
佐川一政 2008 極私的美女幻想 ごま書房
テリー伊藤(企画) 1995 佐川君の一週間(VHS) S t . ピーターズバーグ
安田雅企 1983 パリ留学生人肉食事件 思想の科学社